

中国牧地区における牧畜経済論

呉 精 華

(中国社会科学院農村發展研究所)

中国の国民経済において、牧畜業経済は重要な部門の一つである。これが農業地区牧畜業、牧地区牧畜業、都市郊外牧畜業、及び集約型近代化牧畜業の四つの部分から構成されている。本稿では、中国の牧地区牧畜業経済に重点をおいて論述する。牧地区牧畜業は草原（草地）牧畜業とも呼ばれている。

1. 中国牧地区牧畜業経済の発展概況

中国北方の牧地区は広大な面積、豊かな草地資源、古い歴史を有している。中国の牧地区は東の黒竜江省から、青蔵（青海省、チベット）高原まで続き、中国国土の大半をカバーしている。東西5500キロ、南北3500キロ、面積は約500万平方キロで、全国土面積の53.1%を占めている。中国の牧地区は内蒙古、新疆、青海、チベット、川西草原の五大牧地区、及び黒竜江、吉林、遼寧、河北、寧夏、陝西、甘肅の七つの牧畜業のウェートが大きい省、区を含んでいる。中には266の県、旗がある。つまり、108の純牧畜業の県、旗と158の半農半牧の県である。人口は約4500万人、中で牧民は約1100万人である。牧畜業に従事しているのは蒙古族、チベット族、エウルク族、ハサク族、エレンツン族、ウィグル族、ウズベルク族、東郷族、メンパ族、ロパ族など13の少数民族である。これらの少数民族は代々この広大な草原に生き、生産、経済の繁栄、中国の振興、発展と統一に貢献してきた。

建国後の40年以来、特に改革開放後の10年以来、牧地区の牧畜業経済の発展が大きい。統計

によると、1988年末牧地区では牛、馬、ろば、騾、駱駝などの大家畜が4620万頭で、全国の35.1%を占めている。綿羊、山羊は15000万頭で全国の75%を占め、1949年の3.2倍となっている。豚は1600万頭で全国の5%を占めている。絨毛、毛皮、肉類及び食肉加工品、乳類及び乳製品、狩猟の獲物、漢方薬材料などの畜産品、特産品が全国の30~80%を占めている。

40年間の技術者、牧民の努力によって、中国の牧畜品種の構造には大きな変化が起こった。雑種改良、馴化などによって、牧地区では数十種の優良品種がつけられている。例えば、三河牛、三河馬、草原紅牛、西門達爾（シンメンタール）、利姆贊（リムザン）牛、伊犁（イリ）馬、伊犁（イリ）牛、烏珠穆沁（ウヅモシン）馬、阿拉善双峰（アラサンサンフン）駝、東北細毛羊、内蒙古細毛羊、新疆細毛羊、中国美麗奴（メリノ）細毛羊、羅姆尼（ロムニー）半細毛羊、アル泰臀尾（アライタイテンウィ）羊、アル巴斬（アルプス）絨山羊、盖県絨羊、新金豚、哈白（ハバイ）豚、瘦肉型豚、珍珠（ズンツウ）鶏、白来亨（バイライヘン）、洛島紅（ロトウホン）、紅羽（ホンユ）、白洛克（バイロク）、白鵝、北京鴨、板鴨、乳鴿などがある。毛、乳、肉、禽の飼料効率、労働生産性が高まり、生産周期が短縮するなど、生産効率が高まった。現在、優良品種及び改良品種の牛、馬は牧地区総数の3分の1、綿羊、山羊は55%を占めている。牧畜品種の優良化は、中国牧地区の牧畜業が伝統的なものから近代的なものへの変化の重要なメルクマールとなる。

牧畜業の発展に伴って、牧畜業のサービス体系がよくなりつつある。中国牧地区では次のような10のサービス体系が形成されている。①優良品種の取入れと繁殖、②家畜病害の防止と観測、③草原の改良と建設、④科研、情報システム、⑤飼料加工、⑥牧畜機械化の研究、サービス、⑦畜産物の加工、⑧牧、工、商の総合経営、⑨商品の生産と流通、⑩技術の諮問、法制、対策。

2. 中国草地の牧畜業資源と潜在力

中国の草地(草原、草山、草坡)は合計53億畝で、全国土面積の36.8%を占めている。なかで北方の草原は43億畝で、南方の草山、草坡は10億畝である。中国の草原は欧亜大陸草原の一部である。飼料用作物は禾本科、豆科、藜科、菊科、百合科を種とし、灌木、半灌木もある。草原が広大、平坦であることは中国牧畜主産地の特徴である。そこには飼料作物の種類は2000余り、薬用植物は500余りもある。また、繊維植物、澱粉植物、芳香油植物および珍しい動物が存在している。

中国草原の生態的な地帯分類としては、森林草原、灌水湿草地、草原(干草原)、砂漠ステップと半砂漠ステップの5類型がある。大気降水量および土壌も地帯性がある。森林草原では降水量が600~800mmで、土壌は湿潤の黒カリ土である。草原では降水量が300~500mmで、土壌は栗カリ土である。砂漠ステップでは降水量が100~200mmで土壌は棕色カリ土である。半砂漠ステップでは降水量が100mm以下で、土壌は灰色カリ土である。草原地区の太陽放射エネルギーは145~160キロカロリー/cm²、光エネルギー転化率は0.3~1.0%である。草原の生産力は大気降水量と比例している。森林草原の畝(666.7m²)当り生草量は600~800斤で、草原で

は400~600斤、砂漠ステップでは200~400斤、半砂漠ステップでは200斤以下である。天然草地の飼料作物の栄養成分からみると、灌水湿草地では炭水化物の含有量が高く、草原では蛋白が高い。砂漠ステップでは灰分の比重が高い。

新疆、甘南草原および青藏高原の中で草地在体的に分布している。低地から高地へに従って、塩生灌水草地と低地灌水湿草地、平原砂漠ステップ(礫漠、砂漠)、高平原の草原草地、亜高山灌水湿草地、高山灌水湿草地、ツンドラ、雪線および水河となっている。

東から西にかけては、地形、降水量、植物、土壌、動物の地帯性分布が畜産品種構造の地帯性分布を形成させている。東北草原および呼倫貝爾(フレンベル)草原では、三河牛、三河馬と東北細毛羊を主とする畜産品種構造が形成されている。科尔沁(カルシン)草原、錫林郭勒(シリクウレ)草原では、烏珠穆沁(ウズモシン)馬、草原紅牛、黄牛および内蒙細毛羊を主とする畜産品種構造が形成されている。烏藍察布(ウランザブ)草原、鄂尔多斯(エルタス)草原および寧夏荒漠では、内蒙黄牛、細毛羊、寧夏灘羊、三北裘皮(サンペイチュウ)羊、卡尔倉尔(カラクル)および阿尔巴斯(アルプス)白山羊を主とする構造が形成されている。阿拉善(アラサン)砂漠では山羊と双峰(サンフン)駝を主とする構造が形成されている。新疆砂漠では伊犁(イリ)牛、伊犁(イリ)馬、新疆細毛羊および阿尔泰臀尾(アレタイテウイ)羊を主とする構造が形成されている。青藏高原では海拔が平均4000m以上で、高寒冷山地草地、亜高山灌水湿草地、高山灌水湿草地が多いため、牦(モウ)牛、犏(ベン)牛、チベット系綿羊を主とする構造が形成されている。以上のような構造によって、中国草地での牧畜業経済が以下のような特徴と生態法則をもっている。

1. 地形、大気降水量、植物、草原類型、および土壌類型の地帯性分布は、畜産品種構造の地域分布と一致している。

2. 海拔が高く、乾燥で、かんばつ、強風、砂が多いという厳しい自然の特徴、面積が広く、人口が希少、交通が閉鎖的、草地資源が豊かであるという経済的な特徴、また多数の少数民族が混在しているという地域的な特徴が、中国北部では牧畜業が産業の主体となる根拠となる。また、それが生態効用、経済効用および社会効用の強調と同步調の発展を表している。

3. 自然の生態特徴と社会経済の特徴の制約によって、草原での牧畜経済の拡大再生産が自然生態の拡大再生産に強く依存することになっている。したがって、牧畜業経済が次のような5類型が形成されている。すなわち、①粗放型経営の遊牧経済、②定住輪牧の牧畜業経済、③定住、飼料作補充の半農半牧の牧畜業経済、④飼養を主とする農業地区の牧畜業経済、⑤都市近郊の集約型経営の近代化牧畜業経済の5類型である。牧地区では、①、②、③の類型を主としていることから、自然に依存し、経済の発展が緩く、水準が低く、しかも不安定である。3年に一度が干ばつ、5年に一度が大干ばつにみまわれているため、天然草地の栄養的、年次的、季節的不安定あるいは不均衡が、牧地区の経済の不安定、不均衡をもたらしている。更に、牧地区では人口増加が著しく、資源が大量に消耗し、経営管理が不合理となり、また植物の乱伐や草地への乱牧が、天然草地の生産力を年々低下させている。したがって、草原の保護、維持と建設は中国北部の牧地区での当面の課題となっている。一方、中国北方の草原面積が広く、水熱が季節性が強く、光エネルギーが豊富であることから、草地の潜在的生产力は大きい。現在畝当りの生草生産量は150キロであるが、草

地の保護、管理の強化によって生産力は1.5倍までに高めることが可能である。

4. 草原は陸地の自然生態系の一つであり、また極めて不安定な生態系でもある。草原はエネルギーの転化、物質循環のシステムで、重層、多機能の有機的なシステムである。海拔の段階的な分布は立体的な農業システムとみられる。草原への投入、機能の強化が草原の生態的経済システムを時間空間、物質、情報および価値実現における合理化、生態と経済効用の同步調の発展、また高水準の効率的、有機的な草原の牧畜経済システムの形成をもたらせる。

3. 牧畜業経済の改革と考察

改革開放以来、牧地区の牧畜業において二つの大きな改革が行われてきた。一つは、生産関係の調整である。すなわち、人民公社制から草地の承包、家畜の家族所有という生産責任制への改革である。二つは、畜産物の統一的な購買制度の解消、畜産物価格上昇の政策の制定である。これらが牧民の積極性を引出した。この10年間に、牧畜業経済は著しく発展した。牧民の一人当りの収入が改革前の200元から、1988年の680元までに増加してきた。

一方、改革開放の中で経済界にはいくつかの論争があった。その一つは、中国の肉、乳、卵を農業地区に頼るか、牧地区に頼るかの論争である。中国の食肉の94%が養豚に依存している。養豚は主に農業地区で行われている。養豚の生産周期が短いという点から、牧畜業の発展は牧地区に頼るのではなく、農業地区に頼るべきだという観点がある。この考え方は必ずしも正しくない。その理由として、①牧畜業の生産物のなかには肉、乳、卵だけではなく、皮、毛、絨、役畜もある。そのなかの皮、毛、絨は主に牛、羊などの草食家畜の生産によるものである。豚

は首位を占めているものの、豚、牛、羊、禽の全面的な発展が必要である。②養豚は食糧生産に依存しているが、牛、羊などの飼料は主に牧草である。中国の畜産品種構造は養豚を主とする食糧消耗型から、牛、羊、禽を含めた均衡のとれた食糧節約型へ移行、発展すべきである。したがって、牧畜業への投資は牧地区から農業地区へ傾くべきではない。

二つ目の論争は、中国の食糧構造が穀物を主とするが、乳、肉、卵などの畜産物を主とするかである。1984年に農業が大豊作で、穀物生産量が4000億キロを突破した。その後、食糧は穀物から肉、乳、卵を主とする構造へ移行すべきだと言う論調が現れた。中国の食糧構造の移行は生産力の発展に制約された長期的な過程である。11億の人口を抱えている国にとって、食糧

の問題は最も大きな問題である。農業生産力がまだ高度に発展していない。一人当りの食糧が400キロに至っていない状況では、肉、乳、卵などの畜産物を主とする食糧構造を提唱すべきではなく、合理的に肉、乳、卵、禽などの畜産品の比重を高めていくべきである。一方、牧畜業の発展には穀物生産および飼料生産がなくてはならない。牛、羊などの家畜は食草を主とするものの、一定の穀物生産を前提としている。

三つ目の論争は、工・農産物間、農・畜産物間の価格格差の問題である。現在、工・農産物間の格差が依然と大きい。例えば、牛皮一枚の値段は皮靴二足に当たる。また、農・畜産物間の価格政策も問題である。今後畜産物の価格政策が検討されるべきである。

中国概略図





